

ざんげ

鈴木三重吉

青空文庫

ロシアのウラデイミールといふ町に、イワン・アシオノフといふ商人がゐました。住居すまひと、店を二つももつてゐるほどのはたらき人で、謡うたをうたふことの大好きな、おどけ上手の、正直ものでした。

そのイワンが或夏ある、ニスニイといふ町の市へ品物をさばきに出かけました。イワンが馬車をやとつて荷物をつみ入れさせ、子どもたちや、おかみさんに、いつてくるよとあいさつをしますと、おかみさんは心配さうな顔をして、

「今日立つのはおよしになつたらどうでせう。私わたしはいやな夢を見たんですが。」と言ひました。

「ふゝん、もうけた金を使つてでも来るかと気になるのかな。」とイワンは笑ひました。「そんなことならいゝんですけれど、私わたしはそれはへんな夢を見たんです。あなたがニスニイからかへつていらしつて、帽子をおぬぎになると、おつむりの髪がすっかり白髪になつてゐる夢を見たんです。」

「は、それはけつこうな前兆だよ。まあ、見てお出で。品物をすつかり売り上げて、土産を買つて来るから。」

イワンはかう言ひ、馬車を走らせて出ていきました。そしてニズニイまでの道のりの半分まで来ますと、リアザンの町から来た、或知合しりあひの商人に出あひました。その晩二人は、或村の宿屋について、一しよにお茶を飲んだりしたのち、となり合つた部屋にはいつてやすみました。

イワンはいつも夜は早く寝るのが習慣でした。それであくる朝も、涼しい間に歩かうと思つて、まだ夜のあけないうちに馬車つかひをおこして、馬を引き出させました。宿屋の亭主ていしゅたちは裏手の小さな建物に寝てゐました。イワンはその亭主をおこしてお金をはらつて立ちました。

そこから二十五マイルばかり来ますと、イワンは道ばたの宿屋へ馬車をとめて、馬にかひばをつけさせました。イワンはお茶の用意をたのんで、それが出来るまで戸口にすわつて、ギターをとり出してならしてゐました。すると、そこへ、三頭だての馬車が、リンノと鈴を鳴らしながらとぶやうにかけて来て、ぴたりとイワンの目の前にとまりました。すると中から一人の巡査が兵たいを二人つれて下りて来て、いきなりイワンに向つて、お

まいの名前は何といふか、どこから来たかと聞きます。イワンは、これくかうくですと答へて、

「今お茶が来ます。一しよにお飲み下さい。」と言ひますと、巡査は、そんなことには耳をかさないで、おまいはゆうべどこへ泊つた、一人で泊つたか、それとも、だれかつれのものとしよだつたか、今朝そのつれのものゝ顔を見たか、一たいどうして夜のあけないうちに立つて来たのだと、うるさく聞きしらべます。イワンは、何だつてそんなことを一々聞きほじるのだらうと、ふしんに思ひながら、すべてをありのまゝに話しました。

「何だか私わたしが盗どろぼう坊かおひはぎでもしたやうですね。私はじぶんの商用で出かけて来てゐるのです。そんなにくどくおしらべになる必要はありません。」と、イワンはぷりぷりしてかう言ひました。

「ちよつとおまいの荷物を検査する。おい君たち、こつちへ来て下さい。」と、巡査は二人の兵たいをよんで、イワンの荷物をときはじめました。巡査は、イワンの持ものを一々さがしてゐるうちにふと、手さげ袋の中からナイフをとり出して、

「おい、このナイフはだれのものだ。」と、イワンに向つてどなりました。イワンは首をかしげながらそれを見ますと、刃にべつとり血がついてゐます。

「どうしてこのナイフに血がついてゐるのだ。」と巡査はたゞみかけてどなりました。イワンはびつくりしたあまり、返答をしようと思つても急には言葉が出ず、

「し、しりません。」と、どもりながら答へました。

「今朝見ると、おまいのつれの商人はのどを切られて死んでゐた。おまいがその犯人だらう。あの建物は中から錠がかゝつてゐた。そして、おまいと二人きりしかゐなかつたのぢやないか。そのあげくにおまいの袋の中から血のついたこのナイフが出た。おまいのその顔、そのきよ動だけ見ても事實はたしかだ。言へ。どういふふうにして殺したのか、いくら金を盗みとつたか、きつぱりと言へ。」

イワンは、それは私のわたししたことではありません、私はゆうべ一しよに茶を飲んでからあとは、ずつとあの人の顔を見なかつたのです、私はじぶんのお金を八千ルーブルもつてゐる以外に、人の金なぞはもつてゐません、と、ちかつてかう言ひました。しかしイワンのその声はきれ／＼でした。恐怖のために顔はまつ青さをになつて、まるでその罪人かなぞのやうに、からだ中をがた／＼ふるはせてゐました。

巡査は兵たいに言ひつけて、イワンへ綱をかけさせました。イワンは両足をしばりつけられて、巡査の馬車の中になげこまれると、手で十字を切つて、泣き出しました。

イワンは所持金と馬車につんでゐた商品をことごとく没収された上、そこから一ばん近くの町へはこぼれて、牢屋らうやへおしこめられてしまひました。

警察官はウラディミイルの町へ出かけて、イワンの人柄や、ふだんのおこなひなぞをとりしらべました。町の人たちは、イワンは、ずっと前にはよく酒も飲み、なまけもしてゐたが、近來はあまり酒も飲まない、根が正直ないゝ人間だと弁護しました。しかし裁判の結果、イワンは、あの、リアザンの商人を殺して二万ルーブルの金をとつた、実さいの犯人と認められてしまひました。

二

イワンのおかみさんは、その宣告を聞いてびつくりしました。子ども二人はみんなまだ小さく、下の子などはお乳をはなれないくらゐです。おかみさんは、その二人の子どもをつれて、イワンが入れられてゐる牢屋らうやへたづねていきました。はじめはどうしても面会を許されませんでした。さんざんにねだりたのんで、やうやく聞きとゞけてもらひ、役人

につれられて、イワンのそばへいきました。

いつて見ると、イワンは囚人の服をきせられ、くさりでしばられて、盗人たちや、いろんな罪人たちと一しよに投げこまれてゐます。おかみさんは、イワンのそのありさまを見ると、その場へたふれて、目をまはしてしまひました。おかみさんは、人々にかいほうされて、やうやく正気にかへりました。そして、泣きく子どもを引きよせて、一しよにイワンのそばへすわりました。そして家のことや、店のことなどを話したのち、イワンが町を出てからのことをくはしく聞きたゞしました。

「おや、まあ、さういふわけなのですか。……一たいどうしたらあなたのあかりが立つのでせう。」とおかみさんは涙をふきく言ひました。

「かうなれば、最後に皇帝へ書面を出して、罪のないものに罰を加へて下さらないやうにおねがひするまでだ。」とイワンが答へました。

「^{わたし}私はすぐに皇帝へ願書を出したのですが、つかへされてしまひました。」とおかみさんが言ひました。イワンはそれを聞くと、もう何を言ふ力もないやうに、だまつてうつぶしてしまひました。

「だから一ばんはじめ^{わたし}私がおとめしたでせう？ あんなへんな夢を見たから、あの日は立

つのおよしなさいと言つたんですのに。ね、あなた、私にだけはほんとうのことを言つて下さい。あなたはじつさい何もしたんぢやないのですか。」と泣き／＼問ひつめました。イワンは、両手を顔におしあて、ぼろ／＼涙を流しながら、

「あゝ、おまへまでも私をうたぐるのかい。」と言ひました。

さうしてるところへ一人の兵たいが来て、おかみさんや子どもたちに立てと命じました。イワンは家族たちに、最後の「さやうなら」を言ひました。

イワンは一人になると、今のさつき、おかみさんの言つたことを一々考へかへして見ました。

「あの女までが私をうたがはうとしてゐる。ほんとうのことは神さまが見てゐて下さるばかりだ。おすがりするのは神さまより外にはない。私はもう神さまのお慈愛をまつだけだ。」

イワンはかう決心して、この上皇帝へ嘆願書を出すのも思ひとまり、すべての望みもなげうつてしまひました。そしてたゞ神さまへお祈りを上げました。

イワンは笞刑を加へられた上、流罪にされることになりました。それでまづむちでもつて半死になるまでぶたれました。そしてその傷がなほるとすぐに、他の懲役人たちと

一しよに、とほくシベリヤへおくられました。

イワンはそこで二十六年の間服役しました。今はイワンの髪の毛も、すっかり真っ白になり、ひげも長くのびて、まばらに、そして灰色になつてしまひました。腰もこぐんで、歩くのも、のそり／＼としか歩けなくなりました。心もすっかりしをれつくして口をきくこともまれですし、笑ふことなどは一どだつてありません。たゞ、とき／＼だまつてお祈りを上げてゐるだけです。

イワンは、こゝへ来てから、靴くつをこしらへることを習ひました。そしてその仕事でわづかばかりのお金をもらふと、それでもつて「聖書」を買ひました。そして二十六年の間、毎日仕事をはつてから日がくれるまでの間の、わづかなあかみでもつて、一生けんめいにそれをよみつゞけました。それから日曜ごとには、獄中の教会堂へ行つて、祈きたうしよ禱書うたをよみ、合唱に加はつて讚美歌をうたひました。すっかり年をとつても、むかし謡うたをうたひなれてゐたので、声だけはきれいでした。

監獄の役人たちは、温順なイワンをあはれがつてゐました。一しよにはいつてゐる囚人の全部はイワンを尊敬して、みんな「おぢいさま」とよび「聖徒」とよんでゐました。みんなは役人にたいして何か願ひ出たいことがあると、きまつてイワンから言つてもらひ、

おたがひの間にあらそひがおきると、すぐにイワンのところへ来て、とりきばいてもらいました。

イワンの家うちからは二十六年の間、何のたよりも来ません。イワンにはじぶんの家内や子どもたちの生死さへもわかりませんでした。

三

ところが、或日ある、また一団の囚人がロシアからおくられて来ました。夕方になりますと、ふるい囚人たちは、それらの新来のものたちのぐるりにあつまつて、一々、おまいはどこの町、どこの村のものか、どうして処刑をうけたのかと聞きました。イワンもそれらの人々のそばにすわつて、くびをうなだれたまゝ、話を聞いてゐました。

新来の一人に、六十になるといふ、白ひげをみじかくかつた、背のたかい、がんどしような年よりがゐりました。そのぢいさんが、みんなに向つて、じぶんが収監されたいきさつを話し出しました。

「実にばかげきつた話だよ。」とぢいさんは言ひ出しました。

「おれは、そりについてゐた馬を一ぴきはづして来たんだ。すると、たちまちつかまつて、窃盗罪に問はれたわけだ。おれは言つたよ。何もぬすんだわけぢやない、早くうちへかへらうと思つて借りたんだ。そのしようこには、家へ来ると、ちやんと馬をにがしてやつてるぢやないか。しかもその馬の御者つてのは、おれのもだちだよ。だから、何もかまやしないぢやないかと言つたんだ。だけど、やつらは、いけない、盗んだんだつて言やあがるんさ。ぢや、いつどこで、どんなふうにして盗んだかい、とつっこむと、それにはまるで返答が出来ないんだ。まつたくおれは、何のわるいこともしないのに、こんなところへ送りつけられたんだ。いや、じつをいへば、そのまへには一ど、ほんとうに悪いことをしたことがある。そいつをおさへられたら、りつぱにこゝへおくられても苦情は言へないんだが、めうなもので、そのときには、とう／＼つかまらないですんだんだ。といふと、こゝへはじめて来たやうだが、何、前にも一ど来たことがあるよ。そのときには、永くゐないでかへれたのさ。」

「おまいはどこから来たんだい？」と或一人が聞ききました。

「おれかい？ おれはウラデイミールのものだ。おれんとこのかゝあも、やはりあの町の

生れだ。おれはマカールといふ名まへなんだが、世間ぢやセミヨニツチとも言つてみた。」と、ぢいさんは答へました。

イワンはウラデイミイルと聞くと、うなだれてゐた頭を上げて、

「ではおまいさんは、あの町のイワンといふ商人のことをしつてゐますか。あの一家のものはまだ生きてゐますかしら。」と、それとなく、じぶんの家内や子どもの安否を聞きさぐらうとしました。

「あゝ、イワンの家か。しつてるとも。あの家は金もちだ。もつとも、お父つあんは、シベリヤへ来るとかいふがね。やつぱり、おれたち見たいな罪人らしい。ときにおまいはもういゝ年のやうだが、一たい何をしてこんなところへ送られたんだ。」

しかしイワンは、じぶんのいたましい不幸をうちあけて話す元気もありませんでした。イワンは聞かれてもたゞため息をして、

「わしは悪いことをしたので、もう二十六年もこゝにかうしてゐるのだよ。」と答へました。

「悪いことつて何をしたんだい。」とマカールは、かさねて聞きました。

「いや、かういふ目に合ふのがほんとうだらうよ。」とイワンは言ひました。すると、仲

間の一人がイワンに代つて話しました。だれか悪いやつがゐて、或商人を殺して、血のついたナイフをこの人の荷物の中へ入れこんだのだ、そのために、罪もないこの人が犯人にされてしまったのだと言ひますと、マカールは、

「はゝあん。」と、びつくりしたやうにイワンの顔を見つめながら、ぽんとひぎをたゝいて、

「へゝえ、さうかなア。ふうん。めうなこともあるものだね。だがおまいもひどくおぢいさんになつたな。」と、マカールは一人でかう言ひました。

はたのものたちが、マカールにどうしてそんなにびつくりしたやうに言ふのかと聞きますと、マカールは何にも答へずに、

「や、ともかく、この人にあふつていふのがふしぎなのさ。」と言ひました。

イワンは、それではこのぢいさんは、あの商人を殺した犯人をしつてゐるのかもしれないと思ひながら、

「ぢやアおまいさんはあの殺人事件のことをしつてゐるんだね。それとも、まへにどこかでわしを見かけたことでもあるのかい。」と聞きました。

「はッは、あの事件をしらないでどうするんだ。世間中のうはさに上つた犯罪ぢやないか。^{のほ}

だが、もう古いむかしのことだから、くはしい話はわすれたよ。」

「しかし、おまいさんは、あの事件のほんとうの犯人を知ってるんだらう？」とイワンはつっこみました。するとマカールは笑つて、

「それやおまい、ほんとうの犯人も何も、げんぎい、血のついたナイフが荷物の中から出て来た以上は、その人間が殺したんだらうぢやないか。かりに、ほかのやつが、人の荷物の中へ入れこんだものとしても、その本人がつかまらなげやアだめぢやないか。だが考へて見てもわかることだ、人が頭の下においてゐる荷物の中へ、どうしてほかのやつがナイフなんぞをおしこめられるかい。そんなことをすれば、眠つてる当人はすぐに目をさますぢやないか。」

イワンはその言ひぐさを聞いて、ふゝん、あの商人を殺したのはこいつだなとかんづきました。

イワンはだまつて立ち上つて、あつちへいつてしまひました。

四

その晩イワンは何ともたとへやうもないほど悲しい、いやな気もちにおさへられて、眠らうとしても寝つかれません。これまでわすれようとしてゐた、いろ／＼のことが、一晚中入りかはり目のまへに浮んで来ました。あのニスニイの市へ出かけるときに、門口へおくつて出た、そのときのおかみさんのすがたも目についてはなれません。おかみさんの目の色、笑ひ声、話し声までが、まざまざと目のまへに見えます。それから二人の子どもたちの顔もまざ／＼と浮んで来ました。二人とも、あのとときのまゝの小さな子で、一人はぐわいとうを着て立つてをり、一人は母親の胸の上になだかれてゐます。それからつゞいて、年もわか／＼、ゆかいにくらししてゐたじぶんのことも思ひかへされました。あのととき捕縛されるぢきまへに、あの村の宿屋の戸口に坐つてギターをひいてゐたすがたも目に見るやうです。それ以来、ずるぶんながい間、世の中の苦勞といふものからはなれてゐるといふことをも、つく／＼考へました。と、こんどは、あのとときむちでうたれつゞけたあの監獄の光景、執行官、まはりに立つてゐた人々、くさり、すべての罪人たち、こゝへ来てから二十六年の間のすつかりの出来ごとを考へかへし、それからじぶんが年のわりよりもずつと老いぼけてしまつたことも考へました。

イワンは、いら／＼するほどかなしく苦しくて、いつそのこと、もう、ひと思ひに自殺してしまはうかとまで思ひつめました。

「あゝ、これもみんなあの悪いやつのおかげだ。」とイワンは心の中で言ひました。イワンはさう思ふと、もえ上るやうに腹立たしくなつて来ました。

「あいつを殺してやらうか。さかさに、こつちが殺されたつてかまはない、どうかして、ふくしうしてやらなければ虫がをさまらない。」

イワンは、かう思ひつゞけた後、とう／＼夜があけるまで祈りつゞけにお祈りを上げました。しかしそれでも胸一ぱいのくやしみは取れませんでした。

昼の間は、イワンはわざとマカールのそばへは近づかず、マカールの方を見ることさへしませんでした。

こんなにして二週間といふものが過ぎました。イワンはその間、夜もちつとも眠れないし、のちには身のおき方もないくらゐにもだえなやみました。

或^{ある}晩、イワンは牢屋^{らうや}の中をぐる／＼歩いてゐました。囚人たちは、みんな、壁ぎはにつけてある柵^{たな}の上に一人づゝ寝るのですが、ふと見ると、さういふ或一つのたなの下から、土のかたまりがごろごろとこがり出ました。へんだなと思つて立ちどまつて見ると、れ

いのマカールが、そのたなの下からはひ出して来ました。イワンは、マカールだと知ると、見ないふりをしてとほりすぎようと思いました。ところが、マカールは、いきなりイワンの手をつかんで、

「おい、おれは、この壁の下へ穴をほつてるんだよ。毎晩、長靴ながぐつへ一ぱいづゝ土を入れて、昼間みんなが仕事に出たすきまに、外の往来へあけるんだ。おい、おぢいさん、だまつてゝくれ。穴さへあければおまいもにげられるんだから。おまいがしやべつてしまへばおれはなぐり殺されてしまふんだ。だが、さうなれや、そのまへに先まづ第一ばんにおまいをころしてやるから、そのつもりである。」とおどかしました。イワンは、怒りにふるへながら、マカールの顔を見ました。

「わしはにげ出す気はないよ。また、おまいもおれを殺す必要はない。おまいはもう、とくのむかしにわしを殺してしまつたぢやないか。わしがその穴のことをしやべるか、しやべらないか、それは神さまのおさしづ一つだ。」

イワンはかう言つて、マカールの手をふりはなしてにげました。

そのあくる日、囚人たちが仕事につれ出されるときに、つき番の兵隊たちは、だれかゞ、部屋の中から長靴をつき出して、土をあけるところをひよいと見つけました。兵隊たちは、

おや、と言ひ言ひはいつていつて、部屋中をすつかりしらべてまはりました。すると或寝だいだなの下のところに穴がほりかけてあるのが見つかりました。

だれがやつたのかと、典獄は、みんなを一々せめしらべましたが、だれもかれも私ではないと言ひはりました。中にはマカールのしわざだと知つてゐるものもあつましたが、うつかり口に出せば、たちまちマカールがなぐり殺されるので、だまつてゐました。

典獄は困つたあげく、イワンに向つて聞きました。

「お前は正直な老人だ。神さまのまへで、おれに言つてくれ。一たいだれがあつた穴をほつたのか。」

マカールはそのときも何くはぬ顔をしてゐましたが、イワンが何と答へるかとその顔をじいつと見てゐました。イワンはくちびると両手をふるはせてゐるきりで、しばらくの間一ことも言葉を出すことが出来ませんでした。イワンは心の中で思ひました。

「わしを生き殺しにしたあいつだ。あいつをかばつてやる必要はさらにない。あいつも私を苦しめた代価をはらふのがあたりまへだ。……しかし私がしやべつてしまへばあいつはそくぎになぐり殺されてしまふにきまつてゐる。わしはあいつを商人殺しの悪ものだときめてゐるものゝ、まん一それが私のかんちがひであつたとしたら、よけいな告げ口をして、

あいつを殺させるのも罪なわけである。ともかくしやべつたところで、けつきよく、わしに何の得が来るわけもない。」

「おい、おぢいさん、どうだ。ほんとうのところを言へよ。あの穴をほつたのはだれだ。」
イワンはじろりとマカールの顔を見て答へました。

「それは私わたしには言へません。私がそれをしやべるといふことは神さまがお許しになりました。私が申し上げないのが悪ければ、私をどうにでもなすつて下さい。私の生命はあなたにさし出します。」

典獄はそんなばかな話があるものかと言つて、しつこく問ひつめました。イワンは、どうしてもうちあげませんでした。それでとうとう犯人もわからずじまひになつてしまひました。

五

その晩イワンがやうやく眠りかけようとしみますと、だれだか、こつそりしので来て、

イワンの寝だいだなにそつと腰をかけました。やみの中をすかして見ますとマカールです。「おい、何しに来た。この上わしに何を要求しようといふのだ。」とイワンは、むつとして言ひました。

「いけ。いかないと守衛をよぶぞ。」

かう言ひますと、マカールは、イワンのからだの上へこゝまるやうにして、

「おい、どうぞゆるしてくれよ。」と小さな声で言ひました。

「おまいに何を許すのだ。」

「おれはほんとうに悪ものだ。あの商人を殺して、ナイフをおまいの袋の中へ入れこんだのは、このおれだよ。あのとき、おれはおまいをも殺さうとしたのだ。ところが外で物音がし出したので、ナイフをおまいの袋の中へつこんで窓からにげ出したんだよ。」

イワンは頭をぐわんとなぐられでもしたやうに、ぼうとなつて言葉も出ませんでした。するとマカールはたなからすべり下りて、床板の下に両ひざをつきながら、

「このとほりあやまる。どうぞ許してくれ。神さまのためだと思つて、おれの罪を許してくれ。おれは、あの商人を殺したことを名乗つて出るつもりだよ。さうすればおまいも許されて故郷へかへれる。そのかはりどうか、これまでおまいを苦しめたことだけは許して

くれ。おいイワン、ほんとうに許しておくれ。」

「ふゝん、口だけであやまるのはどうさもないことだ。だけれど、まあ考へて見ろ。わしはおまいのおかげで、今日まで二十六年の間苦しい目を見て来たんだよ。今になつてかへると言つてどこへかへるのだ。わしのようにぼはもう死んでしまつた。小さいときに分れた子ども二人は、もうわしの顔もおぼえてはゐない。わしはかへらうつたつて、かへるところはないよ。」

イワンは、やつと気をおちつけてかう言ひました。マカールは、そのまゝひぎをついたきり、いつまでも立ち上らうともしません。しまひには、とう／＼床板へ頭をすりつけて、「まつたくすまないことをした。許してくれ。おれは牢屋らうやへはいつてびし／＼ぶたれたときでもこれほど苦しくは思はなかつた。かうしておまいのまへにすわつたこの心もちも、むちでぶたれるよりもまだつらいのだ。おれはつく／＼恥ぢ入つてゐる。おまいはおれをあはれんで、穴のことを言はないでくれた。イワンよ、おれはわるものだつた。どうぞ許してくれ。神さまのおためだと思つて許してくれ。」

マカールはかう言ひ／＼、とう／＼しやくり上げて泣き出しました。イワンは、マカールの泣く声を聞くと、じぶんもひとりで、しく／＼と泣けて来ました。

「マカールよ、もう神さまも許して下さいよ。神さまのまへへ出れば、わしだつて、おま
いより何十倍罪がひどいかもわからない。」

イワンはかう言ふと同時に、これまでながい間おもたかつた心が、急にはれ／＼して
来たやうな気がしました。

その晩からイワンは、もう故郷へかへりたいといらくする心もちもとれてしまひまし
た。もう牢屋から出たいとも思ひません。たゞどうかして早く死にたいと思ふだけでした。
イワンは、マカールに、自首なぞをするにおよばないとかたくとめておいたのですが、
マカールは聞かないで、とう／＼自首してしまひました。しかし、ロシアの裁判所から、
イワンを放免するといふ指令が来たときには、イワンはもう死んで、この世の中にはるま
せんでした。

青空文庫情報

底本：「日本児童文学大系 第一〇巻」ほるぷ出版

1978（昭和53）年11月30日初刷発行

底本の親本：「鈴木三重吉童話全集 第六巻」文泉堂書店

1975（昭和50）年9月

初出：「赤い鳥」赤い鳥社

1924（大正13）年11月

入力：tatsuki

校正：伊藤時也

2006年7月19日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

ざんげ

鈴木三重吉

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>